# 闇夜の光

ふぃろ

## Scene1

「今日はあんまり天気よくないなー、月も雲で隠れちゃったし。」
宵闇の妖怪、ルーミアは夜の空を何の目的もなくふよふよと漂っていた。
「お、こんな日に珍しいなぁ、あそこに人間がいるー。しかも空飛んでるわー。ちょっと襲ってこようかしら。」
ルーミアはその人間の方へ向かいながら、あることを思い出していた。
「・・・いくら弱くたって、あんな目で見ることないじゃない。ほんとにひどい奴だわ・・・」

## Scene2-1

博麗神社の巫女、博麗霊夢は今晩の蒸し暑さのせいで、なかなか寝付けないでいた。そのため、気分を変えようとあてもなく幻想郷の空をさまよっていた。
「今日はやけに蒸し暑いわねぇ。雲も出てきて天気もどんよりしてるから月明かりも入ってこないし・・・。鳥目じゃない私でも今日外へ出るのやめた方が良いわね。」
そう言って、神社へ向かって方向転換をしたとき、目の前に小さな少女が空を飛んでいた。
「あなたは、夜に外を出歩いてる人間だから、食べてもいい人間ね。」
「いや、人間だけど出歩いてるんじゃなくて、空飛んでるんだけど・・・。」
「細かいことは気にしないの！それじゃあ、遠慮なく襲わせてもらうわ！！」
「月符ムーンライトレイ！！」
そういうが早いが、その少女はスペルカードを宣言した。
「わっ、何っっっ？！」
突然、まばゆい光とともに弾幕が飛んできた。左右から光線が霊夢を挟み込むように迫ってきて、そして放射線状に飛んでくる小弾が霊夢を正確に狙って飛んできた。いきなりの攻撃に驚きつつも、霊夢は目の前に迫る小弾を、左右から迫ってくる光線に当たらないように小さく右へ移動しながらかわした。そして、左右からの光線は完全に霊夢を挟み込む前に消滅していた。

「わっ、びっくりした～～。でも、あんなんで私を倒そうなんざ、百年早いわ！！」

弾幕が止むと、霊夢は多少驚きつつそう言い放った。すると、幼い少女の姿をした妖怪が暗闇から姿を現した。

「あら、あのスペル避けられたのねー。ちょっと本気でやったんだけどなー。」

と、幼い少女の姿をした妖怪、ルーミアは少し感心したように言った。

「ふん、いきなり攻撃してきて、どうなるかわかってんでしょうね？というか、あんた誰？」

霊夢は憤りながらも、その妖怪に向かって疑問を口にしていた。ルーミアはそういう霊夢を見て、何かを思い出すようにしばらくの間口を閉ざしていた。

「あ、おもいだした！！あんた、紅い霧が空を覆ってた時に襲ってきた人間よね？あのときのこと覚えてるわよー！ちょうどいいわ、今ここであのときの仕返しをしてやるわ！！」

「紅い霧？ああ、そういえば前に紅霧異変なんてのもあったわね。でも、そのときにあんたを倒した覚えはないわ。あんたみたいにその辺にいるような妖怪なんて、いちいち覚えていられないわ。」

「ふん、失礼ね、そうやってなめていられるのも今のうちよ！！」

「闇符ダークサイドオブザムーン！！」

ルーミアがそうスペルカードを宣言すると、ルーミアは闇夜に紛れ、姿がみえなくなった。そしてルーミアが消えたあたりから、大小さまざまな弾幕がばらまかれた。霊夢はその弾幕の隙間を縫うようにやすやすと避けていった。

「ふん、所詮はこの程度ね。適当にばらまいた弾幕なんて当たるわけがないわ。って、うわっ！！」

霊夢が油断していた瞬間、あらぬ方向から弾幕が霊夢の方に向かって飛んできた。そして、一瞬ルーミアが姿を現したと思うとまたすぐにルーミアが闇夜にまぎれて消えていた。そしてまた、さっきとは違う方向から弾幕が飛んできた。

「くぅ、なんなのよこのスペルは！密度は薄いくせに、どこから弾幕が飛んでくるかわからないわ。周りが暗いから、あいつもどこにいるかわからないし・・・。」

ルーミアは闇を操る程度の能力を持つ。これはその名の通り、光を遮断し、周りから自分の姿を見えなくする能力である。

この能力は、日中など明るい場所で使っても、まったく意味がない。なぜなら、闇で姿を隠しても、むしろそこだけが黒く目立ち、

相手に自分の居場所を知らせているようなものであるからだ。強いて言えば、日光をも遮断できるので、この闇の中は涼しいということであろう。前に、そのことを天狗の新聞記者に記事にされたことから、最近は日中によくいろんな妖怪が入り込んでくる。しかし、ルーミアは当然のことながら、そのことを快く思っておらず、その記事を出した天狗のこともまた良く思っていないのである。

だが逆に、真夜中や暗い建物の中など、光がほとんど届かないところではこの能力は大きな力を持つ。自分の姿を闇で覆うことで周りの闇と同化し、自分の姿をくらますことができるのだ。そして同時に、相手に気づかれずにさまざまなところから攻撃もできるのだ。

それを応用した技がこの、闇符「ダークサイドオブザムーン」である。闇で自分の姿をくらまし、その間に大小さまざまな弾幕をまく。特に、今日のように月明かりも届かないような曇天のときは、闇に隠れたルーミアを発見するのはより困難である。いくら霊夢といえど、弾幕の密度が薄かろうが、敵の姿が見えないのならば攻撃をあてることさえできない。異変時でなければ本気も出さない霊夢ならなおさらだろう。

しかし、一見、隙のない強力なスペルに見えるが、実は弱点がある。それは、闇の力が強すぎて闇に覆われている間は自分自身も周りの景色が全くわからないということだ。だから、弾幕をまきおえるたびに闇を消し、こまめに自分の位置を確認しなければならないのである。

「く、これじゃあらちが明かないわ。でも、絶対この手のスペルにはパターンがあるはず・・・。」

霊夢はそう言い放ち、神経を集中させた。そして、霊夢は弾幕のパターンを正確に読むために弾幕の飛んでくる方向、どのような順番でどのような形状の弾幕が飛んでくるかを少しずつ把握していった。

「小粒弾、小弾、中弾、あいつ、小粒弾、小弾、中弾、あいつ、小粒弾、小弾・・・」

そして霊夢は弾幕のパターンを完璧に理解し、ルーミアの出現タイミングも把握することができた。

「・・・小弾、中弾・・・そこよ！！」

そう叫びながら霊夢は中弾が放射線状にばらまかれた瞬間、その方向に向かって札を投げつけた。

「きゃっ！！」

ルーミアは闇を消した途端、いきなり飛んできた札にうまく対処できず、後ろに倒れるようにして体勢を崩していた。霊夢はその隙を見逃さず、すぐさまスペルカードを宣言した。

「霊符夢想封印！」

霊夢の周りから無数の巨大な光の球が現れ、ルーミアに向かって飛んでゆく。

「これで終わりよ！！！」

ルーミアは何とか体勢を整えて、その光のから逃れることができた。しかし、光の球は一度かわしたと思ってもまたルーミアめがけて迫ってきた。ルーミアは光の球に追いつかれぬよう逃げながら、心の中ではあきらめていた。このスペルカードを宣言されたら、もう逃げることはできないのだ、と。

scene2-2

紅霧異変の時、ルーミアは初めて霊夢と戦った。その時は今日と同じように真夜中であった。しかし、空は雲ではなく紅い霧に覆われていた。その時の戦いでルーミアが敗北したスペルカード、それが霊符「夢想封印」なのであった。

夢想封印は霊夢の周りにさまざまな色をした巨大な光の球を出現させ、霊夢の視界にいる相手に向かってどこまでも追尾していくスペルカードである。この光の球は妖怪たちが最も嫌うありがたい光でできており、無理やり妖怪を退治してしまうのである。

そのときにルーミアが弾幕ごっこに使用したスペルは、鳥がはばたく姿を意識して作ったスペルカード、夜符「ナイトバード」と米粒弾を交差するように飛ばした弾幕を飛ばし、何十個もの小弾をまとめて相手に投げつけるというスペルカード、闇符「ディマーケイション」の二枚であった。異変解決のために飛び出していた本気の霊夢にはルーミアのスペルカードなど全く歯が立たず、ものの数分で敗れてしまった。その時に霊夢が使ったスペルカードはこの霊符「夢想封印」のみであった。この時のルーミアは追尾してくる光の球を避けるために、自らの姿を闇で覆い、姿をくらまそうとしたが、空が赤い霧で覆われていたため逆に目立ってしまい、意味をなさなかった。その上、その光の球はルーミアの出した闇に触れた瞬間、闇が一瞬で辺りに霧散してしまったのである。そしてそのまま光の球は無防備のルーミアに向かってきて、被弾してしまったのである。そしてその後、空を覆っていた紅い霧は跡形もなく消え失せ、何事もなかったかのように今まで通りの平穏な日々に戻ったのであった。

scene2-3

ルーミアは以前戦っていた時のことを思い出していた。（やっぱ

り私じゃ、あの人間に勝てないのかなー・・・）。ルーミアは追ってくる光の球を必死に避けながら自分の力の無さを悔やんでいた。そのとき、ルーミアの視界に、天狗の新聞記者、射命丸文がやってくるのがみえた。

文はルーミアのそばまで来たと思うとすぐさま非難の言葉を浴びせかけた。

「はぁ、何をやっているんですかあなたは。真面目に人間を襲ってると思ってきてみたらそのざまとは。しかも相手はあの博麗の巫女ですか・・・。少しは相手を選びましょうよ。」

実は、文はこのルーミアと霊夢の戦いを少し前から観戦していたのである。文は夜に幻想郷を徘徊しているときに、遠くで弾幕ごっこをやっているのを発見して、何か面白そうなことをやっているなと思ってやってきたのである。

しかし、霊夢がルーミアと戦っているのを見て、正直、文はがっかりしていた。その辺の雑魚妖怪とあの博麗の巫女が戦っているのを見たって何も面白いことは起きずに博麗の巫女が圧勝するだろう、と。だが、文は博麗の巫女と戦っている妖怪に見覚えがあった。以前、その妖怪に取材に押し掛けたときに、多少面白いスペルカードを使っていたからである。そのスペルカードとは闇符「ダークサイドオブザムーン」であった。文も霊夢と同じように、すぐに弾幕のパターンを見破り、勝つことができたが、ルーミアの闇の強さに驚いたのだった。普通、文のカメラでシャッターを切れば、弾幕やその他もろもろのものを切り取ることができるのだが、ルーミアの闇は切り取れず、姿を映すことができなかったのである。このことが文の興味をひき、しばらくは観戦していようと思わせたのであった。だが、所詮は闇夜に紛れなければその力を発揮することができない妖怪である。そのことを文はやはり低レベルだと感じているのだ。

「・・・いきなり現れてうるさいわねー。今あなたと話してる余裕なんてないわ。」

文が現れた途端、ルーミアは心底いやそうな顔を文に向けていた。もともといい印象を持っていない相手であったが、開口一番に罵詈雑言を浴びせかけられたら、嫌な顔をするのも当然だろう。そして、文に構わず光の球に追いつかれないよう逃げる速度を上げた。しかし、それでも文はついてきた。

「はぁ、人の話を聞く余裕ももてないのですか、あの程度の攻撃で。しかも、なんですか、そのあからさまに嫌そうな顔は。私があなたに何かしましたか？」

ルーミアは文の「あの程度の攻撃で」という言葉に声を荒げそうになったが、今ここで怒っても仕方がないのでグッと言葉を飲み込んだ。

「それはそうと、あのくらいの速さの攻撃でなんでこんなに苦戦しているのですか？簡単に振り切れるでしょう？」

文にとっても夢想封印の恐ろしさを知ってはいたが、それでもあの程度の攻撃ではやられはしないと自信をもっていた。

「・・・。私はあんたとは違ってこれ以上速く飛ぶことなんてできないわ。」

ルーミアはむすっとした態度を変えずに、素っ気ない返事をした。

そして、必死にあの光の球から逃げ続けていた。射命丸はルーミアの心中も知らずに、その間もつらつらと言葉を並べていた。

「速く動くことができないんなら他の対処法を考えればいいじゃないですか。あなたは闇を扱えるんですから、その闇を自分の姿を隠すためだけではなく相手に向けて飛ばしてみたりとかしてみればいいじゃないんですか。あなたが思っている以上にその力は強力だと思いますよ。」

「・・ほんとは、ちっとも強いだなんて思ってないくせに・・。」

文がそういうと、ルーミアは文に聞こえぬよう、そうつぶやいていた。

「ちょっと！そこの天狗！！戦っている最中に邪魔しないでくれる？！」

霊夢はいきなり現れた文の姿に憤り、声を荒げていた。

「あややや、これ以上ここにいると私もあの博麗の巫女に目をつけられかねません。私はもうお暇しますので、後はがんばってくださいぃ～～。」

文は言いたいことを散々言い放ったあげく、目にも留まらぬ速さで山の方へ去って行ってしまった。

やっといなくなってくれた文に安堵しつつも、ルーミアはまだ動揺を隠せなかった。

ルーミアがこれほどまでに文を嫌うのには理由がある。それは、ただ単に自分のことを記事にされたからというだけではなかった。

## scene2-4

夏のある日、夜の帳が降り、辺りがすっかり闇に包まれたころ、あの天狗が私のところにやって来た。その天狗はいきなり現れて何の説明もないまま、私に向けてシャッターを切っていた。私はその突然の出来事に驚きを隠せなかったが、いきなり写真を撮ってきてはた迷惑な奴だと、追い返すつもりでさまざまな攻撃を仕掛けた。しかし、あの天狗はとてもすばしっこく、なかなか攻撃をあてられなかった。その上、あのカメラでシャッターを切られると、ファインダーに写っている弾幕が切り取られてしまうのだ。そして、抵抗

むなしく、何度も何度も写真をとられてしまった。その天狗は写真を撮るたびにその手帳になにやらメモを取っていた。そのことが多少気になりつつも、うっとうしい天狗を追いかえすことが先だと負けじと弾幕をばらまき続けた。その後、抵抗の甲斐があってか、その天狗は取り終えた写真を見て納得したような顔をしてさっさと帰って行ってしまった。

その時に、私に向けられた視線を私は今でも覚えている。あの蔑むような視線は私の心の中に深く刻み込まれている。その時からだった。私があの天狗に敵対心を覚えたのは。あれは、虫けらを見るような、本当に残酷で冷ややかな目をしていた。私はとにかく腹が立った。いきなり現れていきなり写真を撮られて、挙句の果てにはあんなまなざしを向けられて。私が一体何をしたというのか？本当に憎らしくてたまらなかった。いくら私が弱いからって、あんな目で見ることはないだろう。次に会った時は絶対返り討ちにしてやると思ったのだった。

## scene2-5

ルーミアはあの天狗とのことを思い出しながら、飛んでいた方向を変え、光の球から逃げ続けていた。

「このままじゃ、被弾するのも時間の問題だわ。どうすればいいの・・・？」

そのとき、先ほど現れた天狗の言葉を思い出していた。

「速く動くことができないんなら他の対処法を考えればいいじゃないですか。あなたは闇を扱えるんですから、その闇を自分の姿を隠すためだけではなく相手に向けて飛ばしてみたりとかしてみればいいじゃないんですか。あなたが思っている以上にその力は強力だと思いますよ。」

ルーミアはある一つの考えが頭に浮かんだ。これなら、まだ勝機はある、と。しかし、これを実行に移すにはルーミアにとってかなり抵抗のあることだった。なぜならそれは、ひどく嫌っている奴の考えを受け入れてそれを実践するということだったからだ。ルーミアは文が自分よりずっと強いということは知っていた。あの博麗の巫女や黒い服を着た魔法使いとも渡り合えるくらい強いのも。しかし、それでも、あの天狗の考えを聞き入れるのは我慢ならなかった。目の前の敵を倒すにはそれを受け入れなければならないとしても。

ルーミアが葛藤している間にも敵の攻撃はどんどん近づいてきた。ルーミアの体力も少しずつ限界に近づいてきており、空を飛ぶ速度が落ちていたためだ。そして、光の球と距離を取るのもやっとであった。

このままでは、あのときと同じように何もできずに負けてしまう。

ルーミアの心にそのような考えがよぎった。だが、ルーミアはこのまま終わりにしたくなかった。霊夢に勝つことと、霊夢に勝ってあの天狗を見返してやるんだという気持ちが強かったのだ。

そして、ルーミアはついに決心した。大嫌いな奴の考えを受け入れ、自分の力を信じて戦うことを。

ルーミアは光の球に追いつかれる前に一目散に霊夢の方向へと向かって旋回した。そして片手を突き出し、ルーミアの周辺に現れた闇が霊夢の視線を遮るように飛んで行った。

「っっ！？！？これは、闇を使った目くらまし？だけど今更遅いわ、この技に小細工は効かない！！」

霊夢は一瞬怯んだが、すぐさま自分の優位は揺るがないと確信し、そのまま闇に向かって光の球を誘導し、視界に広がる闇をかき消した。しかし、そこにルーミアの姿はなかった。ルーミアは霊夢に闇を放った後にすぐさま霊夢から距離を取っていた。そしてまたもや、霊夢に向けて闇を飛ばしていた。

「いくら闇で攻撃の邪魔をしても、この攻撃からは逃げられないわ！」

霊夢がそう忠告しているにもかかわらず、ルーミアは闇を飛ばしつづけた。

霊夢は勝利を確信していた。そのまま闇を飛ばし続けていても被弾するのは時間の問題だろう、と。しかしそれでも、ルーミアは闇を飛ばすのをやめなかった。何度も、何度も、霊夢に向かって闇を飛ばし続けた。

実際、ルーミア自身も、相手にうまく闇を飛ばせるかどうかは賭けだと思っていた。いままで、ルーミアは自分自身の周りにしか闇を出すことがなかった。だから、うまく相手に向かって闇を出すことができるのか心配だったのだ。だが、多少ムラはあるものの、うまく闇を飛ばせ、霊夢の目くらましになっていた。しかし、こんなことをしても被弾するのは時間の問題だろうと誰しも思うだろう。だが、それでいいのだ。ルーミアの本当の狙いはそこにあるのだから。そして、次の反撃のためにも、これを成功させることは必要なことであった。

「くっ、いつまで、こんな茶番を続けるつもり？あなたに勝ち目なんてないのよ。もう、大人しく諦めなさいよ！」

ルーミアはもうフラフラの状態で、動きが鈍くなっていた。そしてついにルーミアの方へいくつもの光の球が接近してきた。ルーミアはもう逃げる体力もなくその場に漂っていた。

そしてその時が訪れた。
「・・・勝負、あったわね。」
そう霊夢が勝ちを宣言した。しかし、被弾する前に光の球はすべて消滅していた。
「え・・、うそ・・・。なんで被弾してないの・・・？なんで私の攻撃が消えてしまったの・・・？」
そう、ルーミアが狙っていたのはこれだった。
霊夢はまだ何が起きたのかわからぬまま狼狽していた。その間にも、ルーミアは疲労している体を無理にでも動かしながら、最後の一手に出ていた。
「・符・・・ナ・・バー・」
ルーミアは最後の力を振り絞って、再び霊夢に向かって闇を飛ばしながらスペルカードを宣言した。霊夢は困惑しながらも弾幕を避けることに専念しようとした。そして、やっと思い出したのである。あの敵が誰だったのかを。
「この弾幕は・・・。」
夜符「ナイトバード」。スペルカード戦が制定されて初めて使用されたスペルカード。その名の通り鳥を模した弾幕であるが、その弾幕は鳥に似ても似つかない様なものだった。そして弾幕自体も密度が薄く、一、二を争うほどの最弱なスペルカードなのである。それゆえ、霊夢はこの最弱なスペルカードを使っていた妖怪、ルーミアと戦ったことを思い出したのである。
しかし、このスペルカードは夜符「ナイトバード」ではなかった。
霊夢はそのことに気付いていなかった。
「ふん、あなたのこと、思い出したわ。でも、最後の最後にこの弾幕とは・・・。いくら闇で補助しようともこんなもの簡単に避けられるわ！！」
そして、ナイトバートを避けるうえでの常套手段、自機狙いと自機外しの弾の間を抜けてルーミアに向かって突撃した。その先に弾幕がまだ潜んでいることを夢にも思わずに。
「え・・・、うそ・・・。こんなことって・・・。」
そして、霊夢は闇の中から急に目の前に現れた大玉を避けきれず・・・・・被弾した。
「やった・・、あの時の人間に、勝てたわ・・・。これで、あの天狗のことも・・、見返す・・ことが・できる・・わ。」
そういうと、力尽きたルーミアは近くの草むらの中に倒れてこんだ。
「あややややや、まさか本当にあの妖怪が博麗の巫女に勝つとは・・・。これは大、大、大、大スクープですよ！！いそいでこのことを記事にしなければ！！」

実は、文はあの後、一度妖怪の山に戻っていったが、この戦いの続きが気になり、ずっとこの近くの林に身をひそめて戦いを見守っていたのである。

「っっと、まぁ、記念として勝者の写真も一枚とっておきますかね。・・それにしても、満身創痍になったのにもかかわらず、すがすがしい顔をして寝ていますね。」

文は顔面に微笑みをたたえて、誇らしげな顔をしたまま寝ているルーミアに向けてシャッターを切ったのだった。

## scene2-6

この戦いにおける霊夢の敗因は二つあった。

一つは、スペルの時間制限について失念していたこと。霊符「夢想封印」がルーミアに被弾する前に消滅してしまったのはこのためであった。霊夢はスペルカード戦において驚異的な力をもっているため、スペルが時間切れになるほどの相手と戦うことがほとんどなかったのである。だからこそ、今回もルーミア相手にすぐ勝負がつくと油断していたのである。

もう一つは、予想外のことがおきていて焦っていたこと。普段の霊夢ならば、焦ることなく余裕をもって弾幕ごっこに臨むことができたのだが、スペルの時間制という初歩のルールを失念し、動揺してしまい冷静な判断が下せなかったのだ。それゆえ、最後の弾幕は夜符「ナイトバード」ではなく、夜符「ミッドナイトバード」であったことに気付かなかった。ちなみに、このスペルは弾幕の形状はナイトバードと似ているが、ナイトバードの弱点である箇所をいくつか修正した強化版である。夜符「ナイトバード」には自機狙いと自機外しの間には何も障害がないという最大の欠点であったが、ミッドナイトバードはこの欠点を補うように自機狙いと自機外しの間に大玉を放つという工夫をしたのだ。このスペルカードは実は文に襲われた際にも使用していたが、弾幕を切り取るカメラのせいで大玉を投げつけてもほとんど意味がなかった。だが、夜符「ナイトバード」というスペルを知っており、かつ自力で避けるとなると、夜符「ナイトバード」であるという先入観が邪魔をし、自機狙いと自機外しの間を何の疑いもなく避け、大玉に気付かず被弾しそうになってしまうという、案外避けづらいスペルなのであった。

それでも、全体をよく見れば、細部が違うことに気付くはずだが、霊夢は多少なりとも焦っていた。そのため、どのような弾幕か慎重に見極める前に突っ込んでいってしまったのだ。それゆえ、スペルカード自体違うことに気付かなかった。

だが、霊夢が気付かなかったのも無理はない。なぜなら、ルーミ

アが弾幕をカムフラージュするために闇を霊夢に向けて飛ばしたからだ。
そして、闇を敵に飛ばすという、いままでやったことのない試みを土壇場で成功させたルーミアの強さが今回の戦いの決め手となったのだ。そして、その功績の影には少なからず射命丸文の姿もあったのだ。

## Scene3

後日、霊夢の敗北は射命丸文の手によって幻想郷中に知れ渡り、幻想郷は一時大騒ぎとなった。これは何かしらの異変かもしれない、と思う人々も出てきていた。
「おいおい、この記事本当なのか？霊夢、おまえちょっと手抜きすぎだぜ？熱でもあったんじゃないのか？」
「う、うるさいわね。ちょっと油断してただけよ。あんな妖怪に負けるなんて・・・。」
お茶を飲みに博麗神社まで遊びに来ていた普通の魔法使い、霧雨魔理沙にからかわれながらも、霊夢は内心ひどくショックを受けていた。
一方で、その日の夜、ルーミアはというと、またあの天狗から取材を受けていた。
「ルーミアさん、すごいですね！！よくあの博麗の巫女に勝つことができましたね！いやあ、これは妖怪界隈でもニュースになってますよー！その辺の野良妖怪が妖怪退治の専門家に勝つなんて、快挙ですからね！！」
「・・いちいちうるさいわねー。それにその辺の野良妖怪って・・、他にも言い方があるんじゃないのー？」
「いやあ、すみません、ルーミアさん。そんな言い方するのは失礼でしたね。」
「まったく、こういうときだけは掌を返したように調子が良いんだから・・・。」
と、ルーミアは嘆息していた。
「いや、本当に見直してますよー、ルーミアさん。だって、暗闇の中だけでしか人を襲うことしかできないやつが博麗の巫女に勝ってしまうんですから。」
「・・・。でも、私は闇を操る妖怪なんだから闇に紛れて襲ってもいいじゃないの。」
そういう物言いをするところが嫌なのだとルーミアは心の中で思っていた。

「それに、あなたにとって私の戦い方なんて参考にはならないんじゃないのー？あなたみたいな強い妖怪は暗闇を利用して人を襲う必要なんてないんじゃない？」

「・・・。いえいえ、そんなことありませんよ。あなたの戦い方を見てたら、私も初心に帰って暗闇の中で人を襲ってみようかなーと思いました。そういう意味ではあなたの戦いは立派なものだったと思いますよ。暗闇に紛れて人を襲うという古き良き妖怪の伝統的な襲い方を思い出させてくれる戦いだったんですからね。」

そういう風に言われると、ルーミアも文に対して冷たくは言えないのだった。

「・・何よいきなり。・・・でも、あいつに勝てたのはあなたのおかげでもあるから、感謝してるわー・・。」

「えっっ？」

「じゃ、じゃあ、私は用事があるから！もう二度と私を被写体にしないでね！」

ルーミアはそういうと、自分の周りを闇で覆い、姿を消してしまった。

ルーミアはもう、文に対してあのときほど憎んではいなかった。霊夢に勝ち、文を見返せたということで溜飲も下がったし、何より文の助言のおかげ霊夢に勝つことができだからだ。文自身は何のことかわかっていなかった様子だが。

ちなみに、ルーミアは文を前に闇で自分の姿を覆って帰ろうとしていたが、その闇の中では本人でさえ周りの様子がわからないほどなので、ルーミアは運悪くも近くに立っていた木に衝突してしまっていた。

「きゃっ！！」

文はその様子を見て、クスリと笑みを浮かばせていた。

## levelEX

ルーミアが去った後、文はまだその場に佇み、各妖怪の弾幕の写真とメモがのっている手帳を開き、ルーミアの欄の視線を落とした。そして、ひとり思い馳せていた。

「・・・妖怪が暗闇にまぎれて襲ってくるのは、実は自分の力に対する自信の無さの現れです、か。そんなことはありませんでしたね。暗闇にまぎれて戦うのも戦術の一つ。確かに、私は思い違いをしていましたね。・・あのとき、あの妖怪には酷いことをしてしまいましたね・・。」

そう、文はあのとき、わざとルーミアに対し冷たい視線を投げつ

けていたのだった。それを文は、今更ながら、反省していたのだ。
そして、文はその欄に書かれているメモに二重線を引き、新たにメモを書き加え、そして自分も妖怪の山に帰って行ったのだった。

見てください！！これが闇夜を上手く使った妖怪の戦い方ですよ！！我々もこのような戦い方を参考にして、人間を襲っていきたいですね！！

終